パネルディスカッション「肝炎ウイルス治療後肝癌」

司会：溝上　雅史　先生（国立国際医療研究センター　ゲノム医科学プロジェクト）
　　朝比奈靖浩　先生（東京医科歯科大学　消化器内科）

【司会の言葉】
近年抗ウイルス療法の進歩によりHCV排除あるいはHBV複製制御がほぼ全例で可能となってきたが、肝発癌リスクは依然として健常人より高く、さらなる発癌抑制と効率的肝癌スクリーニング法の開発が望まれている。肝炎ウイルス治療後であっても、長期にわたるウイルス持続感染による宿主ゲノム異常の集積や、線維化および細胞機能障害の残存が生じており、またウイルス排除による急激な免疫学的変化による発癌への懸念も指摘されている。さらに宿主ゲノムへのウイルス遺伝子挿入や潜伏するウイルス遺伝子からの転写･翻訳などの発癌への関与も指摘されている。しかし、肝炎ウイルス治療後の発癌機構には不明な点が多く、またそれに基づく治療法の開発や発癌を予測するバイオマーカーの探索も十分ではない。そこで本セッションでは、ウイルス排除後あるいは制御下における肝癌の実態を浮き彫りとするとともに、肝炎ウイルス治療後の肝発癌機構に関わる最新の研究成果や、発癌予測因子や新たなバイオマーカーによるスクリーニング法の開発、および治療後肝発癌を抑制する新たな対策等について、各施設における基礎的・臨床的研究成果をご発表頂き、肝癌克服に向けての議論を深めたい。